
文化祭カーニバル

阿阿阿阿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文化祭カーニバル

【コード】

N8359U

【作者名】

阿阿阿阿

【あらすじ】

梟タタキ投稿作品。SS形式で書いてあります。予定としては4話で区切り。完結。

看板の娘（前書き）

ミステリー形式の会話劇です。

ただし血生臭いドロドロした奴ではなくて、いわゆる日常のちよっ
とした謎解きみたいな形を取っています。

登場人物

- ・少年（探偵）
- ・少女（委員長兼依頼人）

看板の娘

「盗まれた？何をよ委員長」

「だから文化祭の出店看板よ看板。隣のクラスの看板が今朝方盗まれてたの。きれいさっぱりと」

「ふーん、そりゃ災難だな」

「何を言ってるの、他人事じゃないよ？」

「あ、何でだ？」

「貴方がそれを解決するからよ」

「おいおい、本当に何でだよ」

「だって貴方そういうの得意じゃない。名探偵みたいに」

「得意気になったことは無いんだけどな」

「ならでもやるの。実際困ってるんだから、隣のクラスの委員長が」

「回って来たお鉢の行き先がここか。まあ良いさ、で、こういう事情なんだい？その盗難とやらは」

「さつすが。今日さ、文化祭やるじゃない？」

「やるな」

「その準備としてさ、うちの学校は結構長い期間かけてやって来たじゃない？大体3週間くらいかけて」

「お陰でうちのクラスも立派なものが出来たな。ところでさ、うちのクラスの出展何か欠けてる気がしないか？」

「何も欠けていないわよ、念入りに念入りを重ねて打ち合わせしたんだから。まあ、で、そうね。各クラスともにそれなりに気合いが入ったものは出来上がっているわ。それこそ本番が本当に楽しみなくらいに」

「実際楽しみだ」

「サボらないでね。で、隣のクラスの出し物は喫茶店なの。デザインとか装飾具に凝った、結構な本格派。クラス一団となって頑張っ

て制作した、そしてその頑張りに似合うだけの出来になったそうよ。昨日までは」

「今朝になって看板が無くなった訳か」

「そう。当然のようにその看板も凝ってて、完成までに10日は掛けたみたい」

「看板一枚に大層なことだが、それだけ大層な作品が出来たってことか」

「それだけに今朝の慌てぶりと、見つからなかった失望ぶりは凄くてね。聞いた話だと女子何人かは保険室で寝込んだって」

「それは冗談じゃないな」

「冗談じゃ済まないわよ。一番気合いが入っていたのが、隣のクラス委員長でね。彼女は本当に一から関わって、十まで拘ってたそうよ。つまり彼女からして見たら、愛すべき子供を盗られたようなもんな訳。今も何とか見つけ出そうと躍起になって、あちこち出張っているわ。隣のクラスである私にまで真っ先に泣き付いて来たくらいなもの」

「まあ、でも普通に真っ先に疑われるよな、うちのクラスって。ある可能性としては一番だ」

「そう思って、最後の点検も兼ねて隅から隅までうちの店を探してみただけど、どこにも紛れ込んで無かったわ」

「朝からご苦労さんだな。まあ、でも …… 多分、どこにあるのかは分かったかな、看板」

「へ？え？本当に？」

「おいおい何だよその反応は。君が疑ってどうする」

「え、いや、だって、まだちょっとしか話してないし」

「大きさってのは、何であれ人によって変わるものさ。じゃ、ちょっと行ってくるわ」

「どこに？って、もしかしなくても、看板のどこよね？なら委員長として付いていくわ」

「委員長としてなら、クラスに付いてみんなの面倒を見てくれ

よ。うちだつて開店前でそんなに余裕がある訳じゃないんだ。じゃあ、またな」

「うん、分かったわ、任せて。あ、でも、今回は仕事として認めるけど 帰りが遅かったらサボりとみなすからね」

「サボりは許さない、だつたかな。了解だよ」

「 ただいま。間に合つたよな」

「あ、お疲れ。うん、大丈夫よ、まだ店は開店してないし、時間的にも十分帰りは早かつたわ。看板はちゃんと見つかったの？」

「ああ、きれいさっぱり解決さ」

「結局どこにあつたの？看板」

「もう終わったから良いだろ。それにあんまり広げたい話ではない」

「それは多くの人に話が広がるのが嫌なの？それともこれ以上突っ込まれるのが嫌なの」

「両方」

「なら私だけに話せばいいわ。ありのままをそのまま、別に突っ込んだ話をしたりはせずに。私も他の人には話さないという自信があるから」

「うーん。まあ委員長になら良いか。あのな、看板は委員長だったんだよ」

「はい？」

「あ、間違えた。看板は隣のクラスの委員長だったんだよ」

「ごめんね。もっと分かりやすく頼める？どういうことなの？」

「すっかり立場が逆になつたな。まあ、結論から言つとさ、看板は隣のクラスの委員長が隠していた訳。堂々と隠してあつたよ、その委員長が最初に調べた場所に。無いって報告すればそこには無いことになるからね。それだけの話だよ」

「まだちよつと分かんない。何で彼女がそんなことをしなきゃいけないの？」

「しなきゃいけない、か。まさしくその通り、彼女はしなきゃいけなかったんだよ。どうしても」

「どうして？彼女が一番頑張って苦労して、素晴らしく完成させたのに」

「一番頑張って苦労して、それが素晴らしかったからさ。例えばの話だけど、80年間貯め続けたお金があったとして、それが十億円もあってさ、それ死ぬ直前に使える？」

「あ、うーん、それは無理かも。何かもつたいない感じがする。それまでの人生が何か全部無駄になったような気がして」

「そう。つまりそういうことだったんだよ、彼女は。今朝になってクラスにいち早く来て、そうして今日文化祭が始まる《実感を得て》、《恐くなったんだ》。端正込めた出展が、今日が過ぎたら終わってしまう。消えてしまう。そこで彼女は《衝動的に》、文字通り店の看板を隠してしまっただんだと思う。衝動的に動いて、後に引けなくなっただんだ。いや押せなくなった、というべきかな？」

「衝動的、に」

「そう。誰だっけ祭の後は寂しいさ。ただそれで看板を隠しても、結局は結局が変わらないんだけどね。今日例え出展出来なかつたが、出来ようが、今日が過ぎればクラスは元通りにされてしまうし、ただそれは彼女も分かっていたんだと思うよ。悪あがきっていうか、出来れば《準備を長引かせたかったんだろ》。祭りの準備は、言うまでもなく彼女に取っては幸せだったしね。で、まあ、でもそうは言っても色々保険はかけてたみたいだけど」

「例えば、貴方とか私とか？」

「それと、あと真逆の保険」

「真逆？」

「その保険は貰って来たよ。委員長の《撤退》の手伝いについてね。あつちでは、委員長がついに看板を見つけ出したことになってるよ。場所はあるようで無さそうな場所をでっち上げてね。これで無事、今年の文化祭は全店舗出展可能だ。んで、はい、それがその保険」

「？これは？」

「いやあ、探す手間も見つける手間も省けたよね。これ、うちの出展に欠けていたもの」

「これって、ただのトンカチじゃん」

「彼女が使わないで済んで幸いだよ。あとでもこれは用務員さんに借りたものみたいだから、あと終わったら返さないかね」

「だから何に使うのよ」

「何って、トンカチと言えばカナヅチじゃん」

「カナヅチって……あ」

「洒落心も必要だよ。学生の出展何だからさ。さて、では出展の間だ。だからまずは水を貯めようか。準備は大事だからね」

Fin .

看板の娘（後書き）

終わるかよ！

と突っ込んだ方。終わりです。

明らかに全部を全部説明していませんが、捕捉説明などは今のところ考えておりません。また誤字脱字などがありましたら容赦なく御指摘下さい。

次は全く違う場面に飛んでいきます。

色女と色男（前書き）

登場人物

- ・少年（見物客）
- ・少年（記者）
- ・少女達（出場者）

色女と色男

「ミスコンテストの優勝者はズバリ誰だと思えますか？」

「今年の参加者は14名。そこから選べってことか」

「ええ、そうです。やはり本命は2年の現役アイドルの子でしょうか」

「たまに雑誌の表紙を飾ったりしてる、あのえらく目立つ奴か。まあほとんどプロだしな。確かに本丸だろう」

「対抗馬としては、例の美人三姉妹何かも今年は注目されていますよね」

「ああ、去年一昨年と参加しなかったのが不思議に思われた姉妹けど、実は今年入って来た末の妹を待ってたってのね。3年、2年、1年とそれぞれ顔が広いから票はそれなりに入りそうだが、その分散しそうだな。3人の合計とかならまず間違いなく今年はいいつらがトップなんだろうが」

「トップと言えば、そういえば今回は生徒会会長もエントリーしますね。彼女は厳戒なイメージがあるので、あまりこういうイベントには参加しなさそうですが」

「意外と言ったら多分一番意外なのがこの人だよな。堅物っていうよりは、単に厳肅なんだろうけど、いずれにしてもこういうイベントには無縁な人だ。いや容姿で言えば、それこそ優勝しても構わない人なんだが」

「その優勝がネックでして」

「あん？今年の優勝商品はそんなに豪華だったか？」

「いえ、ただの図書券ですよ。大体キテレツな商品何か、当の当人である生徒会会長が許可なさる筈もないでしょうに」

「そりゃそうか。あ？ならそれこそ何で参加してんだよ？生徒会会

長だけでなく、あいつらみんな」

「まあ、学祭のノリとか、周囲の勧めとか、認められるためとか、色々あるのでしょう。女性の考えは我々男性ほど単純ではありませんが、生徒会会長にしても、監視のためらしいですが、我々観る側としてはなんでも関係ないですからね」

「単純なやつらが観衆つてのは、救いだけだな」

「全くです。さて、そういえば今年は貴女のクラスメイトがお二人ほど参加なさると聞きましたが、それはどのような感じですか？」

「ああ、出るな。もうクラスの連中はノリノリだったよ。二人とも参加するだけはあつて、可愛いし。実は委員長も話には出たんだが、流石に忙しいようで辞退したな」

「ああ、まあそれは仕方ないですね」

「んで、でる二人には否応にも期待が高まってな。一人は演劇部だから舞台慣れしているからか、あんまり緊張はしてないんだが、もう一人が文学部で、そいつが滅茶苦茶緊張してるんだよ。さっきももう、木陰で一人考え込んでてさ、顔も青白くて今にも倒れそうだったよ」

「おや、それはただ事でなく心配ですね。ちゃんと介抱はしてあげたのですか？」

「ああ、近寄つて、ちょっとくらい声かけて元気付けようとしたんだが……」

「だが？」

「そのもう一人のクラスメイトのやつが先に近付いていつてさ、肩をバシンと叩いてから一言二言何か言ったんだ、それで、その子も緊張が取れたような顔をして、二人して楽しそうにどっか行つてたよ。実は俺が一番期待しているのはあいつらだ」

「なるほど、いよいよ楽しみです、何せ皆さんが皆さん本当にお綺麗ですから」

「まあつまり、誰が優勝するかは分からんってことだ。終わるまでな」

「始まつても最後までは、ってことですね。おっと、その本番までもうあまり時間がありませんねー。そろそろ会場にいきませんか？ どうです？ご一緒に」

「ああ、そうだな。行かせて貰おう、ご一緒に」

「良い席が取れると良いですが」

「多分途中から席はなくなるだろうけどな」

「 全員総立ちでしたね」

「予想は付いてたがな」

「いえ、言つてはなんですが去年より盛り上がりましたよ。今年は」

「それだけに荒れたな」

「はい……会長がいなければどうなっていたことか」

「監視の意味は成功したらしいな。まあだが、会長が出る度にそれはそれで盛り上がったから、良かったのか悪かったのか」

「よく無事に終わりましたよね、つくづく」

「思い返してみれば、最初から最後まで問題ばかりだ」

「まず初っぱなから例のアイドルの子が出て来ましたが」

「あれはもう、コンサートだったな」

「親衛隊とかが踊ってましたよね、最前列で」

「プロだったな」

「プロでしたね」

「んで熱さに後押しされたのか、その後の参加者もはっちゃけてたしな」

「三姉妹さんも、順番とか無視して仲良く全員揃って出てましたしね」

「三女が最初単独でやってたんだが、姉たちの悪口を良いはじめて、それに次女がキレて、長女がまとめに行つてたのを、仲良くと言えればだがな」

「仲良かったじゃないですか」

「まあ息はあつてたが……ただそれで結局全員失格を喰らったんだから、またどこかで喧嘩してるかもな、今頃」

「なにやら屋上の方から騒ぎが……」

「聞くな、何も」

「はあ……しかし、そういうことになるのなら、すんなりやったのつて、結局貴女のクラスメイト二人くらいでしたよね」

「正々堂々、プログラム通りにやってたな」

「しかし誰にも負けないくらいに盛り上がってましたね」

「盛り上がらない要素が無かったんだよ。衣装もキメて、演目もしつかりやって、メイクもバツチリで、それに何より」

「笑顔が、他の誰よりも輝いてましたよね、お二人とも」

「ああ、それにちゃんと個性も出てた。演舞と、その演舞を情緒的に謳ったあいつらは、優勝者の名に相応しい」

「同率一位優勝も、歴代初らしいですね」

「来年からは、ああいった協力したのが増えるかもな」

「それで、どうでしたか？」

「あん？何がだ？」

「彼女たちですよ。終わってみましたが、誰が一番でしたかね？貴女個人的には」

「それを聞くのは野暮っていうか、無粋じゃないか」

「個人的な興味ですよ。記事には書かないので安心して下さい」

「つて言われてもなー。今はもう、兎に角何か満たされた気分ではないですよ、その満たしを分類しようつて気にはなれないんだ。完成された作品のどこが好きつて言われてるみたいですよ、作品が好きだつてしか言えない訳だ」

「なるほどー。まあ納得しました。色々と」

「色々？」

「ええ、貴女知っていましたか？今回参加したうちのちょうど半分が、ある目的を持っていたことを」

「半分？優勝か？いや、それなら全員か……」

「分からないでしょうね。貴女は。だから僕がここにいるんですよ？」

「あ？」

「いやあ、投票した生徒の皆さんも知らないんでしょうねー。まさか目玉の参加者達が、いえ今回のコンテストの上位トップ陣が、全員実はただ《一人》のために参加していたなんて」

「おいこら、どういうことだ。ちゃんと説明しろや」

「いえいえ、今回に限っては説明などは不要でありましょう。今回の記事にしても、表にある以上のことは僕は書きませんよ。それが僕の契約でもありますしね」

「契約だあ？」

「ええ、得られた答では依頼人達はきつと満足しないでしょうが、まあ仕事としてはこんなものでしょう。もともと無償ですし、ただの好奇心から動いたことですから。ただ」

「ただ？」

「僕は羨ましいですよ、今回のコンテストの《参加者》が」

「そりゃ、誰だってそうだろう。それを言うなら、俺たちみんながコンテストの参加者だ」

「その通りで、だからこそやはり羨ましいですね。では先輩、ありがとうございました。コンテストと一緒に見れて楽しかったです。来年にも期待しましょうか、今年一年でどう変わるかも。ね」

F i n n .

色女と色男（後書き）

浮気だめ。絶対。

トラブルジェラシー（前書き）

今回は登場人物紹介は敢えてしません。

トラブルジェラシー

「前のガルバン、盛り上がってるなー。今回の一等はあいつらかね。うわ、客席の後ろで何か乱闘起きてる。大丈夫か？」

「無事でしょ、ここの生徒たちなら。しかしまあ、確かに次にやる僕らの気持ちになって欲しいーね、この盛り上がりには参るよ。まあどうやらミスコン参加者があの中にもいたみたいだから、当然と言ったら当然の盛り上がりか。で、僕らのボーカルはどこに行った訳？」

「前のガルバンのファンの子達の、その中の一人の子にアタックしに行ってる」

「リーダーなのに情けないなあ……いや、リーダーだからなのかな？てか時間ないよ、色々間に合うの？」

「早々と玉砕されるならまあ間に合うだろうが……間に合わなかつたらその時はその時で、俺らだけでやれば良さ」

「ドラムとベースだけの特別ステージ？」

「そうそう」

「シユールだね。プレイズ・ジミ・ヘンドリックスじゃあるまいし」「盛り上がらねえよなー。俺ら二人じゃ」

「あれ、何か意外」

「あん？何がだ？」

「君なら『そういう状況こそ燃え上がるものだ！』 的な空気読めないことを言うかと思っただのに」

「空気読めないとか言っつな。ああ、まあそれもそれで有り何だろうけどよ」

「やっぱり有りなんだ……」

「俺らの演奏は三人揃ってこそだろう。三人揃ってこそ俺らのチーム、俺らのチームは三人揃ってこそだ。うむ？今俺良いこと言ったんじゃない？」

「はいはいはい。でもリーダーの女好きにも困ったものだねー。僕らのバンドが評判悪いのも、全部アイツのせいじゃないかな」

「お前のその性格も大概だと思っがな。それよりもやはりビジュアルだろう。ぶっちゃけ学生のバンドなんざ、見た目さえよければ、多少下手でも許されるもんだろうし。ファンが付くかどうかの要因の八割は、見た目のビジュアルやファッションが関わってくると俺は見てる」

「そもそも容姿自体はそうそう変えられないから何とも言えないけど……ステージ衣装とか演出とかは確かに重要だよな。ダサイバンドはそれだけで聞く気失せるもん」

「てな訳で、俺らの今日のステージ衣装について一つ変革をもたらしたいと思う」

「へ？何で。十分カッコいいと思うよ、僕は。そりゃ最初はリーダーのセンスを疑って、仕上がりが怖かったけど、意外と出来は良かったし、着てみたら何か気持ちそれっぽくなったし」

「だから駄目なんだよ、お前は」

「駄目……」

「良いか？俺達が目指すところは注目度アップだ。その点で言えば、今回のリーダーのコンセプトである『漆黒の墮天使』は残念と言えよう」

「ごめん。そのコンセプト今初めて聞いたんだけどさ、衣装脱いで良いかな？超恥ずかしい。ごめん何か凄く恥ずかしいものに見えてきた」

「でだ、今から新しい衣装を用意するのは流石に無理だから、この衣装に少し手を加えたいと思う。言うならば『漆黒の墮天使（改）』だ」

「だよな……もう全く新しい衣装は準備出来ないよね……」

「でだ。まずは肩口を切り揃え」

「超止めて。あのね、いい言葉を教えて上げるね。病気は本人の意思から再発を防ぐものなんだよ？」

「安心しろ。俺は産まれてこの方病気らしい病気をかかったことが無いのが自慢だ」

「僕達のバンドが評判悪いのって、僕の性格の悪さとか、リーダーの女癖の悪さ何かより、君の暴走が度々被害をもたらすからだと思っただけだよ」

「だがまあ、お前がそこまで言うなら衣装については諦めよう。だがしかし、俺はこの状況を見越して実は一つ既に策を打っているんだ」

「策？それって　うわっ!?!何だ!?!」

「うむ。実はリーダーが来るまでの時間稼ぎと、前のガルバンの盛り上がる防止と、ついでに注目度アップのためにステージ上に軽い爆薬を仕掛けて置いたんだ。ポロポロのステージ上なら、俺達の今回の衣装である『漆黒の墮天使』も映えるしな。だが安心しろ。怪我人は出さないように絶妙な調節と細工を」

「言ってる場合か超阿呆!!」

「　結局中止とはな」

「大トリだったのが幸いしたね。いや不幸中の幸いってレベルの幸いだけど。僕らの後には誰にもいなかったから、被害は最小限で済んだよ」

「俺達がやれなかったじゃないか」

「うるさいよ自業自得」

「いやしかし、結局あのあとガルバンはガルバンで更にフィーバーしたのに、当の俺らの番になったら危ないから駄目ってのはどうなんだよ」

「犯人として吊し上げられなかっただけマシでしょう。いや明らか

に僕らが疑われてましたけど。僕が上手く誤魔化さ無ければどうなっていたことか……」

「日頃の行いって大事だよな」

「毎日の行いを大事にしてよ。全く、相談も無しにあんなこととしてどういう了見なんだか」

「いやなー、リーダーも振られたしなー」

「ファンの子達を怒らせちゃったんだから、振られるのは当たり前でしょう。演奏中はともかくとして、演奏が終わったら冷静にもなるさ。冷静になったら、僕たちがやったのはこの生徒たちなら何となく察しは付いてるだろうしね」

「よくよくお前よく誤魔化せたよな。誤魔化せたってか、責任を逃れたってか。リーダーお前がやればいいんじゃないか？」

「お陰様で。でも僕にはリーダーは似合わないよ。柄じゃない」

「んー、まあお前リーダーのこと好きだしな。リーダーには成れないか」

「はあ!？」

「いやお前、リーダーのこと好きだろ?リーダーが今日ファンの子のところにいったのだって、本来なら気に食わなかった筈だ。バレてないとも思ってたのか?バンド仲間をなめるなって、得意の嘘も慣れれば分かるさ」

「……あのさ、もしかしてさ、今日の騒ぎの真相って」

「面と向かってリーダーの邪魔は出来ないよなー。いつもいつも振られるのが前提だから、安心してる部分ってのもあんだろうけど、もしも成功したらたまったもんじゃないだろうし。しかも今回はバンド演奏の前だ。多少なりとも客たちも陶醉する可能性もあるし、そのもしもが起こりうるかもしれない。今回はまあ、結局《中止》になっちゃたから、その心配もなくなった訳だけだな。《怒らせるだけで良かったんだが》、中止は流石に予想外だ。最近調子に乗ってたから、生徒会の連中に睨まれたのかもな」

「……。僕よりもよほど君の方がリーダーに向いてるよ。超」

「よせや。やっぱり俺達のリーダーはリーダーしかいねえよ。リーダーの演奏を背中から見てるのは俺達で、演奏の一番近くにいるのはベースであるお前だもんな。近くにいたら、それだけ感情も近くなる。知ってるか？ドラムってのは一番後ろにいるんだよ。お前がリーダーに惚れたのは、俺にはよく分かるぜ。とてもよくな」

F i n .

トラブルジェラシー（後書き）

今回は残った謎自体が少々分かりにくかったかもしれませんが。

ヒントは立ち位置と前書き。

祭り上げの大円団（前書き）

登場人物

- ・少年（他校生）
- ・少女（情報提供者）

祭り上げの大円団

「保健室が使えない？」

「うん。何か保健室の先生がなくて閉鎖中だつて。ところで閉鎖つて何かエロい言葉だよな」

「でもそれじゃ、色々困るんじゃないの？怪我人とかさ、多分いっぱい出てると思うし。あちこちで。さっきも爆発あつたし」

「うん、実際今日は怪我人が多いみたいだねー、だから何か保健室の隣で臨時治療室開いてるみたいだよー。例の保健室の子がやつてるんだつてー。あ、保健室つて単語もエロいね。保健室閉鎖、うわ厭らしいー」

「保健室の子？」

「あれ？知らない？何か保健室登校児の一年生。可愛いのに凄い問題児なんだつて、スツゴク騒がれてる子ー」

「へー。そんなのがいるんだ」

「そうそう。で保健室に引き込もつてたせいか、治療がすんごい手際が良いんだつてー。それで何か今話題になつてる。保健室登校児がナー스つてのは、何か変な話だと思うけどさー」

「良いことだと思うけど」

「あー、さては可愛い子がナースしてるつて言うから、そんなこと言ってるのかなー？このこのー」

「え、いや、そんなことは無いよ　つて、ん？あれ？ごめんね、メールだ」

「はいはい、構わないよー。しかし保健室ナーズ閉鎖中かあ、うわあ、超エロチック……つてあれ？どうしたの？何か怖い顔してるよ

「、事件？事故？それとも痴話喧嘩？」

「んー、えつと、事件、なのかな？ねえ、ちょっとだけ聞きたいんだけど、良いかな？」

「良いよー。なにににー？」

「この学校でさ、一番強い人って誰かな？」

「最強ってこと？んー、剣道部の主将さんとか、用務員のおじさんとか、食堂のお兄さんとか、番長さんとか、教頭の妹さんとか、警備員のイギリス人さんとか、色々いるけど、最強って言ったたらやっぱりあの人じゃないかな。そう、数々の伝説を絶賛生み出し中のあの人、前生徒会会長が私はこの近辺じゃ向かうところ敵無し最強だと思うよ」

「その人は強いのか？」

「強いつていう問題じゃない。人の皮を被ったドラゴン、血も涙も黒い魔王、千人の魂を刈り取る悪魔、彼と敵対した人達は残らず悲惨な末路を辿ったって言うよ。言うなれば一種の災害、噂じゃ武装した万国のテロ集団を壊滅させたとか」

「ふーん。それなら《安心》かな。その人は今どこにいるのか分かる？」

「さー？ちよつと待ってね。知り合いに聞いてみる。……。……や

ー、はい、分かったよー。東校舎の二階喫茶店で、お茶してるのを見たって情報があるよ」

「助かったよ。それじゃ、えつと……うん。これで大丈夫。だと思っ。あ、そうだ。これからどつかで休まない？」

「今送ったメール気になるなあ……ま、いつや。いいよー、どこに入る？色々面白いところありそうだよー。あれ？ここ何だろ？」

「うん？うわあ、随分と変わったことしてるよあるねー」

「ねえねえ、ここ行こうよ。涼しそうだしー」

「そうだね。行こうか。あれ？何だろ、この金槌」

「凄い凄い凄いよー。聞いて聞いて？何か凄いこと起こったみたいだよー？えっとね、今入って来た情報。二階から人がぶっ飛んだって」

「ああ、さっきから外が騒がしいのは……」

「そうそう。何でも、あの前生徒会会長に無謀にも突っ込んだ人がいたみたいだよー。結果は勿論紙みたいに窓から吹き飛んだんだって、突っ込んだ人が。馬鹿ってか、不運だねー」

「無事だったのかな？その人は」

「例の治療室に担ぎ込まれたって。一応生きてはいるみたい」

「前生徒会会長さんには怪我はなかったの？」

「今はまた何事もなかったかのようにお茶を飲んでるって。実際に刺された程度にも考えてないと思うよ？でさー、どうにもその吹き飛んだ男ってのが、追われていた男でもあったみたい。何でも、あちこちでちっこい騒ぎを起こして、物とか壊したり怪我人を作ったりしてたんだって。どうしてそんなことしてたのかは分からないけど、因果応報ってこういうことを言うのかねー、クワバラクワバラ」

「因果応報というか、自業自得っぽいけどね。人を困らせたなら駄目だよ、やっぱり」

「でも本当に天罰ってあるのかもよー。これまた不思議なこと何だけどさー、ソイツが前生徒会会長さんに突っ込んだのって、色んな偶然が重なったって噂なんだよ。ソイツが逃げてる途中で、痴漢に間違われたり、ペンキを被ったり、レスリング部に技かけられたり、何かそんなんがあって、最終的には事故に近い形で前生徒会会長のところに突っ込んだんじゃないかって」

「よくよく、無事で良かったね」

「うーん。それさ、窓からぶっ飛んだのに大した怪我じゃなかったのは、《たまたま外にあったクツシヨンの山に着地したから》らしいけどー、そんなことって有り得るのかねー？結局運が良かったのか悪かったのかは分からないよ」

「だからそれもプラスマイナスなんじゃないかな？しかしよく知ってるね、さつき起こったことなのに。隅から隅まで」

「まあね。でも情報を統合すると、結構不自然な流れが浮き彫りになるんだよー。何て言うか、作られた偶然っぽいつていうか。まあ宝くじの一等を連続で引く人もいるくらいだから、どんな現象も理屈さえ会えば有り得なくはないんだろうけど。カオス理論は運命で片付けられるし、文化祭で起こった奇跡とでもしておこうか。その方が《自然》だし」

「運命、ね」

「あ、そういえばもう一つ」

「？」

「その不幸運男、例の保健室の子の幼馴染みって噂もあるんだ」

「え」

「しかもしかも。そいつが起こしていた騒ぎつてのも、本当に小さくてシヨボいやつばかりだったんだって。《ちようどよく保健室に通うくらいの怪我人ばかり残して》ね。そうそー。それと保健室の子もね、実は普通に教室で授業は受けられるくらいには健康何だつてよー。単に4月に学校に来れなかったのを引き摺って、保健室に引き込まつてたみたい。今回の件がきっかけになつたのか、文化祭が終わつたら《退院》するみたいだよー。いやいや、プラスマイナスで言えば最終的にプラスに付いたのかな？今回の事件」

「……………」

「あ、それと保健室の先生だけど、今さつき学校に来たよー。どうやら車の故障だったみたいで、《先生の事前の言い付けで、ちゃんと代役をやっていた保健室の子》に、感謝してるつて。保健室も無事解放されて、一件落着だね。まさか犯人が臨時治療室最後の患者になるとは思わなかったけど」

「……………何て言うか、さ」

「うん？」

「色々うまくいかないもんだね、世の中。いや、逆にうまくいきす

祭り上げの大円団（後書き）

第一部はこれにて完結かな。

要望があれば舞台を変えて第二部を出します。

読んで下さった方々ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8359u/>

文化祭カーニバル

2011年9月30日03時28分発行